フランス小説移入考

富田仁

東京書籍

フランス小説移入考

富田 仁

東京書籍

富田 仁（とみたひとし）

1933年，東京江戸川に生まれる。早稲田大学第一文学部卒業。同大学院博士課程修了。専攻，フランス文学。現在，日本大学教授，日本仏学史学会常任理事，日本比較文学会理事。
著書，訳書――『日本近代比較文学史』『佛蘭西學のあけぼの』，ヴァン・ティーゲム『比較文学』（訳）他。

フランス小説移入考

昭和56年3月27日　第1刷発行

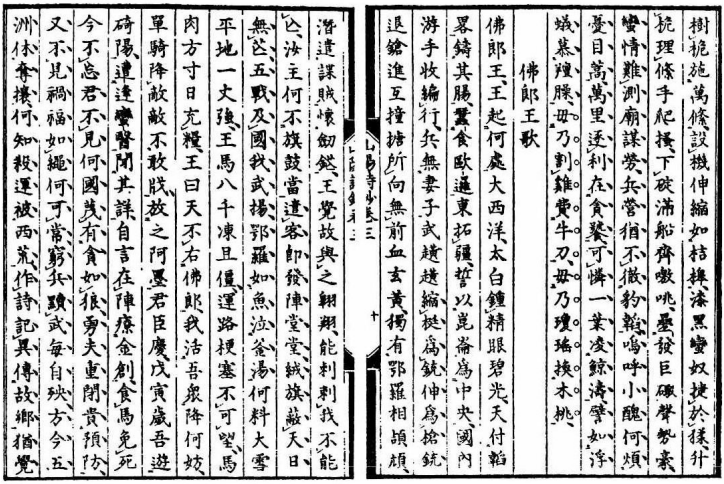
著　　者　富田　仁
発 行 者　小高民雄
発 行 所　東京書籍株式会社
東京都台東区台東1-5-18　〒110
印刷・製本　図書印刷株式会社
定価1800円

©Hitoshi Tomita 1981, Printed in Japan
1098-553046-5313　乱丁・落丁の場合はお取替いたします

まえがき

日本とフランスの出会いは十七世紀初頭にさかのぼる。一六一五年（元和元年）十月の初めごろに、伊達政宗がローマ法王の許に支倉六右衛門常長を使節として派遣したとき、嵐を避けるため三日間ほど南フランスのサン・トロペに上陸し滞在した。これが日本人がフランスの地を踏んだ最初であった。サン・トロペの領主夫人たちによる支倉常長一行に関する記録が現在カルパントラの図書館に保存されていて、支倉たちが捨てたはな紙を群衆が争って拾ったことなどのエピソードが綴られている。

一方、フランス人が最初に来日したのはそれよりも少しばかり歳月が経ってのことであった。平戸のオランダ商館にフランソア・カロンが着任したのは一六一九年である。カロンは両親が新教徒であるためにフランスからベルギーに移住し、オランダ人として日本にやって来たのであるが、フランス人の血筋をひく人物であったことにはまちがいない。だが、今日では一般には、最初に日本の地を訪れたフランス人はギョーム・クールテ神父であるとみなされている。一六三六年六月、フィリピンのマニラからキリシタン禁令下の日本に向かったイスパニアのドミニコ会宣教師たちのひとりに、フライ・トマス・デ・サント・ドミンゴというイスパニア名を名乗っていたクールテ神父がいた。一カ月



山陽寺少長三　十

樹旎施萬條設機伸縮如枯槎漆黑蠻奴捷於猿升
梳理條手紀攝下硤沸船舟嗷咷墨發巨礮聲勢豪
蠻情難測廟謀愛兵嘗猶不徹豹韜嗚呼小醜何煩
憂目蒿萬里逐利在貪饕可憐一葉凌鯨濤擘如浮
蟻慕羶朕母乃割雞費牛刀母乃瓊瑤換木桃

佛郎王歌

佛郎王王起何處大西洋太白鐘精眼碧光天付韜
眾鑄其腸鬣食歐邏東拓疆誓以崑崙爲中央國內
游手收編行兵無妻子武趨趨編挺爲鋭伸爲搶銃
退鎗進互撞搪所向無前血玄黃獨有鄂羅相頡頏
潛遣諜賊懷劒來王覺故與之翱翔能刺刺我不能
亡汝主何不旗鼓當遣客即發陣堂堂緘旗蔽天日
無亡五戰及國我武揚鄂羅如魚泣釜湯何料大雪
平地一丈強王馬八千凍且僵運路梗塞不可望馬
肉方寸日充糧王曰天不右佛郎我活吾衆降何妨
單騎降敵不敢戕放之阿墨君臣慶戊寅歲吾遊
碙陽連連鑾聲閒其謀自言在陣瘵金創食馬免死
今不忘君不見何國哉有貪如狼勇夫重閉貴預防
又不見禍福如繩何可當窮兵黷武每自殃方今五
洲休奪攘何知殺運被西荒作詩記異傳故鄉猶覺

頼山陽「佛郎王歌」

後、琉球に到着したクールテ神父たちは役人に発見されて捕えられ、一年間獄舎に繋がれたのち、薩摩を経て長崎に護送され、きびしい取調べと拷問の末に殉教した。一六三七年九月二十九日のことである。

日本とフランスの出会いはいずれもキリスト教布教にかかわるものであった。これらの出来事については シピオーネ・アマチ『伊達政宗遣使録』、レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』などに記載されているが、日本側の文献、資料はみられない。

さて、日本が鎖国に入り、オランダのみが唯一のヨーロッパへの窓口となる時代を迎えると、わずかにオランダ語の書物を通じてではあるが、フランスの書物が少しばかり伝えられるようになった。それもきわめて実用的価値の高いものに限られていて、たとえば、アンブロワズ・パレの『外科学概論』、ショーメルの『百科事典』などが紹介された。これに対してフランスでは、十八世紀になると、オランダ経由であるけれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

殺氣逆奚囊

七星春歌 伊丹酒名、硝港所致皆泉醸、伊丹獨有此一品或招余供此賦謝、

重碧瀲灩淥長缾、何緣命名喚七星、腕擎琥珀光逆掌、訝他寒芒照畫犀、吾戶雖小嫌甜酒、常恨泉醸不可口、寡聞煩君更往驗、始覺萬愁付一帚、君不見我胸未能羅二十八宿、我腹猶堪藏北斗、

長碕詩十解

火海松魚始上街、火雲稍作亂峯堆、連朝坤位風方熟、等待洋船入港來

入港西洋賈客船、雞樓信砲數聲傳、兩藩戍卒森旌

ど、日本趣味が拡がるようになった。

十九世紀には日本の国際的環境にも徐々に変化が生じ、いきおいフランス語の学習の動きもみられた。長崎のオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフの指導でオランダ通詞の本木正栄などによりフランス語辞書『拂郎察辭範』の編纂が試みられ、これとはべつに、まったく独学で村上英俊が仏英和三ヵ国対照の辞書『三語便覽』を刊行したのである。

このころ、頼山陽はその漢詩（写真参照）にナポレオン皇帝を詠んでいる。ナポレオンの威名が日本にまで及んだ証拠としても注目される漢詩であるが、日本の文学にフランス的のものが現れた最初のものとしても忘れられない。

やがてペリー来航による開国で、フランスとも修好通商条約が結ばれ、慶応三年（一八六七）パリ万国博覧会には徳川民部公子昭武が兄慶喜の名代としてパリに赴き、国と国の交流が本格化した。パリ万国博覧会はヨーロッパの人びとに日本の芸術を示す大きな機会ともなり、会場にしつらえられた日本茶屋の芸妓たちへの人気はゴンクール兄弟やプロスペル・メリメなどの文章にもうかがわれるほどであった。メリメは女友達に日本の芸妓の帯を〝瘤〟と表現してその印象を書き送っている。

ゴンクール兄弟は日本の浮世絵、とくに葛飾北斎、喜多川歌麿などに大きな興味を寄せ、いわゆる

日本趣味を拡げるのに貢献した。

徳川幕府が瓦解し、明治政府が誕生したとき、日本とフランスの関係は微妙な変化をみせていた。従来、幕府はフランスと接近し、その技術援助のもとに横須賀製鉄所を設立し、シャノアーヌ団長以下の軍事顧問団を招き、横浜仏語伝習所を開いて両国の交流に役立つ人材を育成させようとしていたのであり、パリ万国博覧会へ徳川昭武を派遣したのも、一つにはフランスからの経済的援助の依頼という目的があったのである。フランスとしても幕府に対立する薩摩藩にイギリスが加勢していることで、日本の実質上の主権者である幕府に援助し、日本を舞台にする国際的駈引きを有利にしようとする魂胆があったようで、いろいろと画策したのであった。ところが、幕府が潰れてしまい、新政府が樹立され情勢が大きく変わってしまったので、とまどいを否めなかった。

幸いにして、新政府は幕府から横須賀製鉄所をそのまま引きつぎ、富岡製糸場を最初の官営工場として設立し、フランス人技師を雇い入れるなど、フランスとのつながりを深める方針をみせたので、フランスからの産業技術の導入がさまざまに行われた。フランソア・コワニエが生野鉱山の改革に尽力し、アンリ・プレグランが横浜のガス灯建設に貢献したのはその一例である。

殖産興国こそ近代国家の確立を急ぐ日本としては焦眉の急務であり、当面は近代的法律の制定とともに、西洋の先進諸国からの文物制度の移植に追われ、文学の紹介などまでには手がまわらなかったというのが現実であった。だが、世の中も落ち着きをみせるようになると、実学的な書物の紹介から文学作品のそれへと移り、明治十年代に入るや、西洋文学の翻訳が急速に盛んになる。

明治十一年は織田純一郎訳『欧洲奇事花柳春話』の出版された年として翻訳文学史上に注目されるのであるが、この翻訳に先だって同年六月、川島忠之助がジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』を『新説八十日間世界一周』として翻訳・刊行している。フランス文学の最初の原典訳でもあり、ジュール・ヴェルヌもの流行の端緒を飾る翻訳ということで特記される出来事である。

なお、この時期にフランスでは西園寺公望がジュディット・ゴーティエの協力によって『蜻蛉集』（一八八五）をパリで刊行している。『古今集』などから和歌を選び、これを西園寺がフランス語に訳し、それをゴーティエが和歌を模して訳し直したものであり、日本文学のフランス語翻訳としては最初の本格的な訳業であった。

本書では、明治期の近代フランス小説の移入の諸様相を考察することに主眼をおいている。たとえばジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』に始まるヴェルヌものの流行とそれに触発されたとみられる矢野龍溪『報知異聞浮城物語』と押川春浪『海島冒険奇譚海底軍艦』における『海底二万リュー』とのかかわりを考察するというように、フランスの作家の日本文学にあたえた影響をあきらかにすることを意図し、ヴェルヌ以下、ジャン＝ジャック・ルソーと中江兆民、島崎藤村、エミール・ゾラと尾崎紅葉、アルフォンス・ドーデと徳田秋聲、ギ・ド・モーパッサンと三遊亭圓朝、プロスペル・メリメと森鷗外、泉鏡花、芥川龍之介との関係をとりあげ、ピエール・ロティについてはその日本および日本人観、とくに日本の女性観を日記と作品とを対照させて眺め、さらに一般大衆読者に広く読まれたフランス

翻訳小説として、フォルチュネ・ド・ボアゴベ、アレキサンドル・デュマ父子、ヴィクトル・ユゴーの作品とその翻訳者である森田思軒、黒岩涙香、長田秋濤の訳業を考察することにしたい。

いささか独断と偏見にみちた対象選定であるが、フランスの近代小説が及ぼした影響の諸様相を詳細に網羅的に考察するには紙数の都合もあり、ほとんど不可能であるし、総花的にとりあげると、すこぶる教科書的で面白味がないので、思い切って対象を限定し、そこに集約化してフランス作家の影響の波動なり痕跡なりを見てみようと考えたのである。もちろん、そうした対象選定にはずれた部分を補うという意味から、最初に概観展望の章を設け、そこに戯曲、詩歌をも含めて、フランス近代文学の日本文学への影響の顕著な様相を眺めてみるつもりである。

本書では、とりあげたフランス作家と日本文学とのかかわり方が必ずしも同一でないということもあり、それの考察についても異なったアプローチをしている。対象が違えば考察の方法も異なるのは当然であるし、つとめてさまざまなアプローチの仕方を試みてみようと考えたのである。したがって、本書は私なりの比較文学研究の方法的試論の実践の書であるといえようか。

一九八〇年秋

著　者

目

次

まえがき 1

序説 明治のフランス文学 13

第一章 ジュール・ヴェルヌ 43
本邦初の翻訳から大ブームへ

第二章 ジャン＝ジャック・ルソー 75
啓蒙思想と「告白」の問題

第三章 エミール・ゾラ 101
尾崎紅葉にみる影響

第四章 アルフォンス・ドーデ 125
明治期の〝幻の文豪〟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五章　ギ・ド・モーパッサン　151
「名人長二」をめぐって
第六章　ピエール・ロティ　173
「お菊さん」の真相ともう一人の〝異人〟
第七章　プロスペル・メリメ　199
歴史小説・怪奇性・短篇の技巧
第八章　ユゴー／デュマ父子／ボアゴベ　221
明治大衆小説の系譜
明治期フランス文学翻訳年表　251
参考文献　285
人名索引　293
書名索引　302

装幀●吉岡秀高

フランス小説移入考

序説●明治のフランス文学

(1)

西洋文学の翻訳は足利時代末期にさかのぼることができる。キリスト教の伝来により、いわゆる切支丹関係の書物を中心にして西洋の書籍が伝えられ、その翻訳が行われたが、文学作品としては『イソップ物語』などが訳出された。『伊曾保物語』はその一つである。

江戸時代になると、『解體新書』をはじめとし、医学、軍事、工学など実利的な書物の翻訳が盛んになった。文学のそれは少なかった。もっとも、ホメロスの『オデッシイ』が『百合若大臣物語』として早くも足利末期に伝えられ、お伽草子、幸若舞、さらには浄瑠璃本、八文字屋本、読本、草双子などにとり入れられている。坪内逍遙は明治三十九年一月「早稲田文學」に「百合若傳説の本源」の一文を寄せ、ユリシス王は百合若大臣であり、百合若物語はオデッシイの粗筋を翻案したものであることをあきらかにして注目を浴びた。

ところで、翻訳文学としては切支丹版の「サントス(聖徒)の御作業のうち抜書」(天文十九年＝一五五〇)をべつとすれば、文禄二年(一五九三)天草で刊行されたイソップ物語の翻訳が最初のものである。すなわち「日本の言葉とヒストリヤを習い知らんと欲する人のために世話に和らげられたる平家の物語」は当時の天草の人びとのことばに『平家物語』を書き改め、これをローマ字で表した日本最初のローマ字本『平家物語』に『イソップ物語』を合綴して出版されたものである。題して「イソポのファブラス。ラテンを和して日本の口となすもの也」と表紙に記されている。巻頭に「イソポが生涯の物語略」というイソップ伝がつけられてある。

「イソポのファブラス」の初めのところに、「これをマシモ・プラヌーデといふ人、希臘(グレコ)の言葉より羅典に翻譯せられしものなり」と記されているが、すでに「翻譯」という語が天草の人びとに理解されていたことを示すものとして興味深いものがある。

南蛮人(ポルトガル、イスパニア人など)に代わってオランダ人が日本に渡来し、やがて鎖国時代を迎えるや、唯一の西洋人として日本と深いかかわりをもつようになると、前述のように医学、兵学、天文学、数学、物理、化学など実用的な学問の紹介とそれに関する書物の翻訳が一般になるが、中島廣足の『後夢路記』(文政六年＝一八二三)所収の「やよひうた」「また同じこころのうた」のような西洋の詩も伝えられていた。これはマティアス・クラウディウスの作で、原詩は一七七〇年にドイツ語で書かれたものである。

江戸末期になると、ダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー漂流記』が二種類翻訳されて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com